

## 海を越えた日本語の履歴 (2)

早 川 勇

### 要 旨

本稿で取り扱うのは言語接触の問題である。具体的には、日本語語源の語彙で英語に借用された語の歴史的研究を行うことである。筆者はこの15年余り英語文献における日本語語彙の初出年調査を行ってきた。この研究の過程で、日本語語彙の数奇な歴史に触れることができた。また、このような研究をするのでなければ会うことのなかったような日本語や日本（文化）にも触れることができた。それらの語彙を取り上げ、その語の歴史を2回に分けて語りたい。今回、9-17の項目で取り上げる語は banzai, goban(g), harakiri, hiragana, Kaki(y)emon, kanji, katakana, maki(y)e, mama(-)san, Mikado, mousmee, nashiji, Satsuma, Shinto, Tojo, tycoon などである。

キーワード：英語に入った日本語、外来語、借用語

### 9. 碁と碁盤と五目並べ

私は碁ができない。昔の教員は必ず碁が打てた。なぜかという、泊まりの宿直というのがあり、やることもないので先輩の教員が新人に碁を教えたからである。

碁の起源は古い。天平時代に唐から日本へ伝わった。このゲームはかなり前に欧米にも紹介された。ところが「碁」は goban(g) と誤って表記された。この誤解はずっと続いている。*The Shorter Oxford English Dictionary* の1973年版には go はなく goban があり “A game played on a chequer-board...” と解説が加えられている。さらに誤解を生み、goban(g) はいわ

ゆる「五目並べ」だと理解されることがあった。「碁」と「碁盤」と「五目並べ」がごちゃまぜになっているのである。このような誤解を正すべくチェンバレン(Basil Hall Chamberlain 1850–1935)は*Things Japanese* (1890)で次のように述べている。‘Go, sometimes, but with little appropriateness termed “checkers” by European writers, is the most popular of the indoor pastimes of the Japanese, —a very different affair from the simple game known to Europeans as *goban* or *gobang*.’ (p. 136)

この記述では不十分だと考え、第2版(1891)ではこう解説した。‘Go, properly *gomoku narabe*, often with little appropriateness termed “checkers” by European writers, is the most popular of the indoor pastimes of the Japanese, —a very different affair from the simple game known to Europeans as *Goban* or *Gobang*, the name of the board on which *go* is played.’ (p. 194) この版では *goban(g)* が「碁盤」を指すことを明記した。これによって1つの誤解は解消したが、説明のために挿入した表現によって新たな誤解を生んでしまった。

そこで第5版(1905)では次のように訂正した。‘Go, often with little appropriateness termed “checkers” by European writers, is the most popular of the indoor pastimes of the Japanese, —a very different affair from the simple game known to Europeans as *Goban* or *Gobang*, properly the name of the board on which *Go* is played.’ (p. 215) チェンバレンのように日本を知り尽くしたように人でもこんな誤解が起こるのである。

もう1つの点を指摘しよう。*chawan* を *Things Japanese* (1890) では “a thin fish soup with mushrooms” (p. 124) と説明している。これは「土瓶蒸し」か「茶わん蒸し」のことであろう。しかし、不思議なことに同書には *chawan-mushi* も言及があり “a thick custardy soup” と説明されている。この語についてはその後の版において訂正はないところを見ると、一部の人々の間では上記のような語の使い方があったのかもしれない。

さらにこんな例もある。*yakimono* は “raw fish (although the name means “broiled”)” (p. 124) と説明されている。( ) 内に注記までであるが、これも変である。ひょっとしたら、「酒の肴」と「焼き物」を混同したか聞き間違えたのかもしれない。

ささいなミスを取り上げ、チェンバレンの学識や功績をおとしめようと考えているわけではない。チェンバレンは1873年(明治6年)5月にいわゆる「お雇い外国人」として来日した。翌年9月から海軍兵学寮の英学教師となった。さらに、後の東京大学文学部国語学研究室の基礎を作った。その時の教え子が上田万年、岡倉由三郎らである。明治24年には外国人としては初の東京帝国大学名誉教師となった。

ある語を他の言語において借用した人の誤った解釈が定着してしまうことはよくあることである。そして、誤った理解がそのまま歴史に残ることもある。我々のような凡人は、英語を読むときに誤った理解をすることなど日常茶飯事である。誤解を恐れていたら、外

国の人と付き合うことはできない。ただし、1つの言葉の理解が大問題を引き起こすこともあることは知っておかなければならない。

1978年(昭和53年)、日本のある地方でこんな事件が起きた。漁場を荒らすというのでイルカを殺した。この話題が国内で報道された。その翌日、ヨーロッパから猛抗議が日本に向けられた。「日本人は野蛮だ」というのである。なぜ、ヨーロッパの人々があんなに怒るのか未熟な私にはよく解らなかった。動物愛護団体が声をあげているくらいにしか思わなかった。その後、私が日英比較を行うに際して、語彙の含意( connotation )について考える機会があった。日本語の「フクロウ」と英語の owl は含意においてどう違うかなど。そこで dolphin のもつ含意について学ぶこととなった。この動物はヨーロッパの人々にとって「聖なる動物」である。このように、言葉の理解の不足が国家間の摩擦にまで発展することもあるから厄介である。

## 10. 神道, 将軍と御門と大君

日本語の語根に英語の接辞がつき、新たな語が作られることがある。Shinto (神道) という語根に各種の接尾辞がつき Shintoism, Shintoist, Shintoistic, Shintoize, Shintoization の語が生まれた。同様に, shogun から shogunal, shogunate, shogunite, shogunship が作られた。さらに, tycoon からは tycoonal, tycoonate, tycoonery, tycoonish, tycoonism, tycoonness, tycoonship などの語が生まれた。これだけの派生語をもつということは、これらの語が英語語彙体系のなかに深く入り込んでいることの証明である。同時に日本文化や歴史を紹介するのに不可欠な語だということでもある。

明治維新前後に日本を訪れた英米人の目に Shinto はどう映ったのであろう。それは日本古来のもので、特に天皇家と深い係わりがあり日本人の精神を体現するものとしてきわめて重要だと考えられた。Kami-no-michi とも呼ばれた。当時の英米人は仏教よりも神道に関心があった。この Shinto を最も深く研究し海外に知らせたのは P. Lowell : *Occult Japan or the Way of the Gods* (1894) である。kami-oroshi など驚くほど多くの神道に関する専門語がこの書には出てくる。

Shinto と同じくらい英語文献に頻出するのは Ryobu(-shinto) である。「両部神道」のことである。両部神道とは日本固有の神の信仰と仏教とを折衷し融合調和したものである。ただし明治以降、神仏混淆は禁止され、この考えは衰退する。私自身はこの語よりも「神仏混淆」「神仏習合」という日本語でこの歴史的事実を理解していたが、英語文献ではこちらの語は現れない。対立する宗教が融合するなどということは、キリスト教の宗派間で何世紀にもわたって血なまぐさい戦いを繰り返してきた西洋の人々には信じられないことで、

多くの西欧人が言及したのであろう。

また、「将軍」「御門」「大君」についてもみたい。西欧世界では18世紀くらいから shogun と Mikado は分けて考えられていた。shogun は俗界の帝王で事実上の支配者であるのに対して、Mikado は聖なる世界の帝王である。ただし、御門はその住む所によって daira(sama) と呼ばれることもある。むしろ、daira という呼称の方が1600年前後の古い英語文献では一般的である。このためか、Mikado には派生語はない。グリフィス (William Elliot Griffis 1843-1928) が *Dux Christus* (1905) などの著作で Mikadoism という語を作ったが、彼以外には誰も使っていない。なお、徳川幕府は外国向けに大君という呼び方を用いたことも確認しておきたい。ただし、この tycoon は現在では実業界の巨頭や政界の大物を指す。

## 11. 切腹と腹切り

江戸末期、外国人にかかわる事件がいろいろ起きた。文久2年(1862)、薩摩の大名行列を乱したとして警護の藩士はイギリス人を切り捨てた。生麦事件だ。その藩士は切腹を命じられた。この状況はイギリスにも harakiri という名で伝えられた。もう1つ「堺事件」がある。慶応4年(1868)堺港に上陸したフランス軍艦の兵たちが、堺の警固にあたっていた土佐藩の武士と衝突した。その結果、フランス人22名が殺傷された。新政府は20人の武士を切腹させ事を納めようとした。フランス側は武士たちを裁判にかけそれなりの処分を考えていた。しかし、日本側は切腹の座を設けフランス人代表者の臨席を要請した。切腹の儀式に臨席したフランス人の幾人かはその場で嘔吐した。11名が切腹した時点で中止となり、残りの9名は罪人として土佐に返された。これを機に harakiri という語は欧米人の間に広まった。

harakiri が英米の一般大衆にまで広く知られるようになった大きな要因の一つは1868年に切腹に至る事件を目撃したイギリス人外交官ミットフォード (Algernon Mitford 1837-1916) が出版した *Tales of Old Japan* (1871) であろう。この作品は英米においてかなり版を重ね多くの人々に読まれた。このなかに忠臣蔵が登場する。さらに、F. V. Dickins: *Chiushingura; or The Loyal League* (2nd ed. 1880) という本が刊行され、harakiri や samurai、ひいては日本精神が西洋の人々の間で定着していった。

年末に決まって放映される「赤穂浪士の忠臣蔵」を見るのが私の楽しみである。だが、私は切腹の場面にはほとんど関心がない。その最後のシーンに至るまでどのような形で緊張を高め話を展開できるかが見所である。もちろん、最後に死があるから、その前の1つ1つの時にはたわいもない出来事が輝きを見せるものである。

「腹切り」という語は日本人に浮ついた印象を与えるのに対して、「切腹」は厳粛な儀式

を思い起こさせる。切腹は日本人には武士道の精神と超人的な勇気象徴である。さすがチャンバレンは日本人の心を見抜いていて *Things Japanese* (『日本風物誌』1) のなかでこう述べている。「ハラキリという日本語が、世界中に知れわたっているのに、日本人自身はほとんど使わないというのは、不思議な事実である。日本人自身はほとんど常にセップクという同義語を用いることを好む。これは漢語から来たものであるから、この方が優雅であると彼らは考えている。」(p. 279) にもかかわらず、英語では *harakiri* という語が定着している。

この語と同時に英語に入った語が *junshi* である。前に言及した Mitford, A.: *Tales of Old Japan* (1871) にこの語が登場する。江戸時代ですら武士はもはや戦場において忠誠心や武勇を誇示できなくなった。そこで、「殉死」という形で主君への忠誠を誓った。明治になり西欧化が進み、切腹は野蛮だとして廃止論が持ち上がり殉死もなくなった。

このように語ると西洋人は *harakiri* を幕末になって初めて知ったと考えるかも知れない。決してそうではない。それ以前に日本を訪れた人々も、この日本に特異な儀式に注目していた。例えば、ケンペル (Engelbert Kaempfer 1651–1716) もその一人である。彼の著した『日本誌』のオランダ語版には切腹の図とその解説があるが、*harakiri* とか *seppuku* という言葉は用いられていない。

*harakiri* や *seppuku* と呼ばれる形態の自殺を文化人類学的に分析したのはベネディクト (Ruth Benedict) である。 *A Note on Japanese Suicide* のなかで日本の自殺の主要類型を示した。この研究は日本人の自殺を予防することが本来の目的であった。しかし、第2次世界大戦中もっとも悲惨な集団自決が起きた。1944年6月から7月にかけてサイパン島で、約4000人も日本人が島北端の切り立った断崖 (Banzai Cliff) から海に飛び降り自殺した。沖繩戦においても、投降を勧める呼びかけはあったものの自殺が続いた。このように行為に対して、「名誉の戦死」「玉砕」「散華」などの美辞麗句が使われた。戦争で捕虜になることは恥であるとするのが日本の文化様式である。こういう日本人はベネディクトにとって最も気心の知れない敵であった。

## 12. 漆と蒔絵

日本の工芸品はヨーロッパの人々の心を引きつけ離さなかった。ポルトガル人やスペイン人が日本にやってきたころ、彼らが注目したものの一つは *tansu* である。タンスといっても、私のような貧乏人はせいぜい桐のタンスを思い浮かべるくらいである。先日、岐阜県立歴史博物館で南蛮時代の歴史資料を集めた展覧会があった。そこで私は初めて本物の *tansu* に出合った。それは象嵌や螺鈿のすばらしい装飾を施した美術品である。

ご存知のように china はもともと中国で作られたのでその名がある。同じように, japan (漆器) は日本が発祥地である。この語が英語文献において初めて現れるのは17世紀中頃である。J. Stalker and G. Parker: *A Treatise of Japaning and Varnishing* (1668) という100頁足らずの本も刊行されているくらいである。この漆器の製造に関する専門語がいくつか英語に借用された。

漆器の文様を表現する技法もまた英語に持ち込まれた。『広辞苑』などをもとに説明したい。

- ・ togidashi (研出蒔絵) 漆地の上に漆で文様を描き, その上に金, 銀などの金属粉をまきつけ, 乾燥後, 透漆または黒漆を塗り, 十分に乾いた後, 木炭でといで下の金銀などをおぼろに表したものの。
- ・ hira-makiye (平蒔絵) 漆で文様を描いた上に細かい金銀粉をまきつけ, 表面を平らに仕上げたもの。
- ・ taka-makiya (高蒔絵) 錆漆や炭粉や錫粉などで模様や画面を盛り上げ, その上に蒔絵を施し立体的かつ華麗に仕上げたもの。

地蒔きという文様の背景や空間に用いる技法としては nashiji が有名で, この語は英語文献にも頻出する。また, 工程に関する語も出てくる。

- ・ nashiji (梨子地) 薄く偏平の梨地粉を蒔きつめ, 透明度の高い漆を何度も塗り込み, 表面を研いて梨の肌のように仕上げること。
- ・ jimigaki (地磨き) 地の漆を十分に乾燥させて堅い砥石で空研ぎをし, 地漆の表面を平らに整えること。

他に, tansu などに装飾を加えるための技法として日本人もよく知っているのは螺鈿である。

- ・ raden (螺鈿) あわびなどの貝殻の真珠光を放つ部分をとって, 文様に合わせてヤスリや小刀で切ってはめ込んで装飾とするもの。

蒔絵を作るための urushi も japan と同じように英語に入り同化した日本語の1つである。この語も1600年前後に英語に入っている。この語には派生語もある。urushic, urushinic, urusiole である。urush(in)ic は形容詞であるが urush(in)ic acid の表現で用いることが多い。urusiol [ol は oil のこと] は1907年に漆から抽出された毒性のある黒い成分で日本語でもウルシオールと呼ばれる。これは漆粘膜の耐光性を向上させるために用いられるという。

### 13. 柿右衛門, 権兵衛, 鍋島

日本の陶磁器が英語文献に登場するのは明治中頃である。日本各地の陶磁器名が英語で紹介され、いろいろな語が英語に持ち込まれた。その1つに *raku* がある。*raku* とは楽茶碗のことである。私がイギリスのエクセター大学に留学していたとき、*Raku* の展示会があるというので郊外まで脚をのぼした。町の中心から車で30分くらいだった。日本の楽焼を模した焼き物を作っていたのは40歳前後のイギリス人であった。突然の日本人の訪問を喜んで、日本の焼き物の話をしてくれた。そして、そのイギリス人が私に「私の曾祖父は日本の北海道に長いあいだいました。辞書も作りました。」というのである。「辞書を編纂したんですか。あなたの名前は何ですか。」「バチェラーです。」「私はバチェラーの編纂した辞書のことを知っていますよ。」奇遇とはこんなことをいうのだろう。バチェラー (John Batchelor 1854–1944) はアイヌ語とか北海道の歴史に精通した人でないと知らない人物だ。彼は1889年(明治22年)に『蝦和英三対辞書』を編纂した。初版は誤りも多く、その後改訂を繰り返した。日本人でもバチェラーのことを知る人は余りいないのに、私は今エクセターの片田舎で *raku* を楽しむ彼の曾孫と話しているのである。

*raku* 以外にも多くの焼き物名が英語に入った。*Arita*, *Bizen*, *Imari*, *Kutani*, *Seto* くらいなら日本人だったら誰でも知っているが、私のように酒を嗜むほうだけに関心のある人間には分からないものも多く出てくる。

- *Kaki(y)emon ware* 柿右衛門焼は酒井田柿右衛門(1596–1666)が創始した。彼は肥前有田の生まれで、中国の磁器を学び赤絵の絵付けに成功した。非対照的な下絵、無地の部分に、赤絵を引き立たせるため青・緑・黄の釉薬を塗った。以降、酒井田家の窯元は柿右衛門を名乗っている。柿右衛門の磁器は17世紀後半に輸出され、ドイツのマイセン窯で模倣された。英語では *Arita* という表現と同時に *Kaki(y)emon* もよく使われる。
- *Nabeshimayaki* 鍋島焼は佐賀の鍋島家が1722年に製作し始めた磁器である。一般の売り物ではなく將軍家への献上品などとして焼かれた。
- *Satsuma ware* 薩摩焼は、文禄の役(1592)の際に連れ帰った朝鮮の陶工によって創始された。1873年のウィーン万国博覧会に薩摩焼きの大花瓶が出展され称賛を得た。これ以降、*Satsuma* がヨーロッパに広まった。
- *Ohi pottery* 加賀藩五代藩主前田綱紀のころ京都の楽を焼いていた職人が大樋村に陶土を求め、楽焼の茶道具を焼いたのが大樋焼の始まりとされている。
- *Imbe pottery* 伊部焼とは備前焼のことである。

- ・ Nishikide ware 錦手焼は中国から舶来した。
- ・ Takatori pottery 高取焼は福岡県産の陶器である。
- ・ Kinkozan ware 銀光山は1755年以降、将軍家の御用茶碗などを製作した。
- ・ Gombei pottery 権兵衛焼き。

これらの専門語が英語文献に登場する時期は、ヨーロッパにおけるジャポニズムが台頭する時代と重複する。1867年に開催されたパリ万国博覧会において日本は大量の陶器・磁器・漆器・武具・浮世絵の版画・和紙などを展示した。その人気は高く、閉会後はほとんど売却された。特に歌麿、北斎、広重などの浮世絵はフランスの印象派の画家たちだけでなく一般の人々も購入した。明治年間には浮世絵の一級品はもう日本にはないほどだった。しかし、皮肉なことに、これだけ大量に流出したために日本美術に興味の有るすべての人々が直接目にすることができた。ジャポニズムが開花するに至った遠因がここにあると考える学者もいる。しかし、万博を政治経済的な側面を理解しておくことも大切である。「万国博覧会はイギリスをはじめとするヨーロッパの強国やアメリカが世界各地に市場を開拓するための見本市であり、博覧会に名を借りた国威発揚と貿易促進のためのデモンストレーションであったともいえるのではないだろうか。」(三井秀樹『美のジャポニズム』p. 39-40)

ゴッホはオランダにいた頃から浮世絵を収集していた。彼は公式のサロンから閉め出され、新しい表現形式を求めていた。その斬新な表現を浮世絵の構図と色彩に求めた。彼は1887年にパリのル・タンブランで浮世絵展を開催した。また自分の絵のなかに日本の浮世絵を描き込んだ。その年、アルルに移住したのは日本の「光」への憧れだったといわれている。

1995年秋、私はオランダからベルギーを旅行した。アムステルダムでゴッホ美術館を訪ねた。私が好きなゴッホの作品のなかでも特に見たかったのは一枚の素描画である。“Sorrow”と称するその絵は、本当に暗い部屋に飾られていた。光による変色を防ぐためである。私はこの絵を通してゴッホの人間としての画家としての苦悩を感じていた。娼婦の背中の太い線はゴッホの叫びに似ていた。次の日、私はベルギーの安ホテルに泊まった。ブリュッセルの街を歩こうとそのホテルの前に出たとき、何げなく掲げている標識が目にとまった。そこにはこう書かれていた。このホテルは以前町工場であった。ここでゴッホが働いていたというのである。私は感動して心が震えた。しかし、最近になって思うのだが、ゴッホの絵は本当に芸術性が高いのだろうか。私たち日本人は絵それ自体よりも、自分たちのなかで作らあげたゴッホの人生に惚れ込んでいるだけなのかもしれない。2004年秋にアムステルダムを再び訪れたが、この画はもう見られなかった。

## 14. 宣徳, 小道具, 縁

美術工芸品として Sentoku をご存知でしょうか。私はこの歳になるまで知らなかった。宣徳銅器のことである。宣徳とは明の時代における宣宗の治世の年号である。15世紀の前半にあたる。この時代に鑄造された中国の銅器をまねて日本で作られた青銅器が Sentoku である。私の祖父は質屋をしていたので銅の火鉢などが家のなかにいっぱい残っていた。名前は知らなかったが、あれが宣徳火鉢だったのであろう。この銅器は今ではもう見かけない。その理由の1つは、戦争で銅の供出をしなければならなかったからである。

刀剣に関する専門語がランダムハウス大辞典の初版(1966)に多数収録された。この研究を始めた頃、kodogu や fuchi などの語に戸惑ったものである。舞台の小道具や川の淵と思い込んでいた。いろいろ試行錯誤をしながら研究を進めるうちに、これらの語が刀の部分を目指す専門語だということがわかってきた。

- kodogu 鋳(つば)など刀剣の附属品をいう。
- fuchi 縁とは刀の柄(つか)口につける金具のこと。
- seppa 柄と鞘(さや)とに当たる部分に添える板金を切羽という。
- Ito sukashi 糸透かしは糸のように細かい文様を鋳に彫る彫り方である。
- kurikata 栗形とは刀の鞘につけられた止め具である。
- mitokoromono 三所物とは剣の附属品である目貫・筭・小柄を指す。
- mokko 鋳の形で一般的なものが木瓜(もっこう)である。
- riohitsu 刀の鋳の両櫃をいう。
- shibuichi-doshi 四分一どおしは刀の鞘につける飾り金具をいう。
- kari(-)mata 狩股、雁股は先が又の形に開く矢をいう。

こんな風に言葉で表現してもよくわからない。

ランダムハウス大辞典編纂者の一人に刀剣のマニアがいたのかもしれない。他の辞書には収録されていない語ばかりである。これらの専門語は第2版(1987)ではほとんど姿を消した。日本人の私ですらこれらの語には初対面である。ただし、1つだけ日常的に使っている語がある。それは切羽である。「切羽詰まる」という表現のなかに隠れている。この切羽が鋳の表裏にはめられ鋳を動かないようにするもののだということを知る人は少ないだろう。この seppa には seppa-dai というのも付いている。日本刀から生まれた日常語は他にもある。「折り紙付き」は本阿弥一家が鑑定した刀の鑑定書からきている。

## 15. パートリッジの軍俗語辞典に収録された日本語

E. Partridge: *A Dictionary of Forces' Slang 1939–1945* (1948) に収録されている日本語語源の語を示したい。

英語の *banzai* は戦争と深く結びついている。*OED* の定義では天皇を迎える時や戦いの時に用いる叫びまたは歓呼である。しかし、*banzai* は「向こう見ずな」「盲目的な」「騒々しい」などの意味で形容詞的に使われることが多い。*banzai party* (大騒ぎをして上陸する海軍兵士の一団, 上陸の際の大騒ぎ), *banzai attack*, *banzai charge* (万歳の叫び声をあげての決死の総攻撃), *banzai run* (万歳を大声をあげての一气突撃), *Banzai Cliff* (サイパンにある断崖) など米軍の俗語である。*Banzai Cliff* は我々に沖縄の数々の悲劇を思い起こさせる。そして、私は「沖縄を返せ」を心から願い合唱した英文科の学生のころを思い出す。

*Tojo* は米軍の俗語で日本兵を指す。もちろん東條英機から作られた言葉である。東條は1941年に組閣、陸相と内相を兼ねた人物である。パートリッジの辞書には *Private Tojo* が収録されていて *A Jap.* と書かれている。また、この辞書には同じく日本人の意味で *Nip* も収録されている。

パートリッジの辞書はきわめて特殊な俗語を扱うが、これだけしか収録していない。この辞書が戦後すぐに出版されたためか、日本軍の捕虜としての生活や駐留軍の日本での生活のなかで米語に入った日本語は含まれていない。

## 16. 綴りの定まらない米軍俗語

外国語を耳で聞いたまま母国語の文字で記録する場合、綴りの一部が欠落したりかなり変わった綴りになってしまうことがある。英語から日本語への例をあげよう。メリケン、プリンはその例である。これらは *American*, *pudding* を明治の人々が聞こえたまま日本語の片仮名で表記したものである。また、人名の *Hepburn* をみて、純情可憐な女優ヘップバーンを思い出す人がほとんどだろうが、これは明治学院大学を創立したヘボンでもある。ヘボンはまさに耳に聞こえたままを片仮名で表記したものであろう。

この逆の現象がアメリカ軍人の俗語に多くみられる。第2次世界大戦中、米兵が俗語として用いた日本語が米語に潜入している。その一部は現在まで生き残っている。これらは綴りや発音において変化が大きいので、日本人ですら日本語だと認識出来ないほどである。*skosh* もこのようにして生まれた英語である。ウェブスター大学版第11版(2003)にも収録されている。日本語の「少し」にあたる。日本語の副詞が英語に入った唯一の例である。その辞書には *'just a skosh bit shook'* という例が掲載されている。

綴りの定まらない語がある。hooch, hoochie, hootch, hootchie, hooty などの綴りがある。日本人が話す言葉を米兵が聞きそれぞれ適当に綴ったからであろう。これは日本語の「家(うち)」を語源とするが、米兵の俗語としては単に住居の意味になったり防御用の塹壕の意味になったりする。

hancho, honcho も米兵の俗語である。「班長」のことである。戦時中の捕虜収容所での生活から米語に入った言葉に違いない。ウェブスター大学版には語源が [han squad + chō head, chief] とある。この語は現在も boss などの意味で広く使われている。

mousmee, musumee, mousee, mus も米軍の俗語である。日本人や韓国人の若い女性、特に日本や韓国に駐留する軍人の妻や愛人ときには売春婦を指す。しかし、語源的には普通の「娘」を指す言葉である。このため、この語は「娘」の意味でそれ以前の英語文献にしばしば現れる。さらに、mousmee はアジサイの1品種でもある。この木の小さな花の可憐さは日本の「娘」さんにぴったりあっているという説明がある。この意味だけがウェブスター大辞典の第4版には載ってほしいものだ。

ここまでは綴りがかなりアメリカ英語式に崩れた例をみてきた。それ以外にも戦争と関連して英語に入った日本語はある。

## 17. 戦後の混乱から米語に入った日本語

「神風」といったら多くの日本人は蒙古襲来を退けたあの風を思い起こすだろう。日本を知り尽くしていたハーン (Lafcadio Hearn 1850-1904) も *Kokoro* (1896) のなかで “That mighty wind still called Kami-kaze— ‘the Wind of the Gods’...” と記している。しかし、今日の英米人 (特に第二次世界大戦を体験している人) には kamikaze とは「神風特攻隊」のことである。時には省略して kaze といった。この語は日本語をそのまま借用したものであるが、「神風特攻隊」のことを baka (bomb) と呼ぶこともある。これに対しては、さすが軍国主義に反対する私でも一言文句をいいたくなる。確かに軍国主義は馬鹿げたものであるが、青春を生きたくとも生きられず清冽な死を遂げた若者の気持ちを思うとこのような表現には怒りを覚える。現在でも kamikaze は英語にかなり定着した語であるが、ほとんどの場合「向こう見ずな」という意味の形容詞として用いる。kamikaze attacks, kamikaze pilots, kamikaze raids という戦争と関連した表現だけでなく、kamikaze karate, kamikaze taxi driver などいろいろある。

英語の tenko は戦時中における日本の捕虜収容所での点呼である。収容所では朝夕召集をかけ点呼を行った。点呼と称して、しごきや暴行が行われた。1939年から1945年にかけて日本の捕虜収容所で虐待を受けた英米人が、そこでの体験から得た日本語を米語に持ち

込んだのであろう。この頃の虐待に対して日本政府は明確な謝罪や保証をしてこなかった。このことが、イギリス人やオランダ人の一部に根強い反日感情を残しているのである。

wooden kimono とは棺桶のことである。棺桶が何故こんな表現になったかは定かでない。私たちが学生だったころ、アメリカはベトナムで戦争をしていた。ベトナムでは多くの若いアメリカ人兵士が竹槍で倒された。日本の企業でも戦争で潤うところもでてきた。兵器を製造していると噂されていたある会社では寝袋を大量に生産しかなりの利益をあげたという。こんな棺桶代わりの寝袋を作って儲ける会社など許せない。日本でもベトナム反戦運動が広がりをみせていた。

Tokyo Rose とは第2次世界大戦中NHKの対米放送女性アナウンサーたちにつけられた愛称である。厭戦気分を催させるために、連合軍兵士に甘い声で呼びかけた。米軍兵士が知っていた日本人はTojoとTokyo Roseであった。「東京ローズ」と称する女性は一人ではなかったが、最も人気が高かったのはシカゴ生まれで日系二世のIva Toguriであった。戦後、彼女は占領軍に逮捕され裁判にかけられた。アメリカ国籍であったため国家反逆罪により禁固10年の有罪となった。1977年に名誉回復したがアメリカ国籍は剥奪されたままである。

pompomを『新英和大辞典』でみると、「(軍俗)性交」という意味が出ている。ポンポンは赤ちゃん言葉で「お腹」を指すが、米軍の俗語であるpompomは戦後のパンパンのことであろう。ただし、『広辞苑』を引くと「パンパン」の原語は不祥とある。名古屋では特に駅裏にそういう女性がうろついていた。忘れもしない。小学校の修学旅行へ行くというので集合場所の駅裏へ父親と一緒にいった。駅に近付くと一人の女性が父親に近寄って何か話した。それは子供心に異様な光景で一生忘れることはない。

mama-san, mamasanも米軍の俗語であるといえば、戦後派の私でも「米兵相手のバーや飲み屋のママさん」であることくらいの検討はつく。戦後、沖縄を初めとして各地にアメリカ軍が駐留していた。そうした米兵は日本のバーなどで飲むこともあった。そこで使われていた言葉が「ママさん」である。私は名古屋のど真ん中で生まれ育った。名古屋では現在白河公園があるあたりにアメリカ村というのがあった。周りは塀で囲まれ、そのなかに多くの米兵用の住居が建てられていた。平屋の立派なものではなかったが、アメリカ式の建て方で幼かった私の印象には鮮明に写るものだった。私の世代では“Give me chocolate.”などと米兵に食べ物などをせびることはなかったが、いやな思い出である。ただし、mama-sanはバーのママさんから芸者屋の女将さんや相撲部屋のおかみさまで意味が拡大してしまっている。しかし、これは借用語の宿命で、これをもって用法が間違っているなどというのは筋違いである。こういう言語学の常識を私たちに講義して下さった大学の先生方が駐留軍で通訳として働かされ英語力を研いたというのも歴史の皮肉である。

私が若い英語教師だった頃、持て囃された技法の1つにパターン・プラクティスというのがある。簡単な文型を生徒に与え、その中の語をどんどん入れ替え文を作る練習である。それなりに意味はあるが、きわめて機械的で生徒はすぐ飽きてしまうし、練習をさせている教師も疲れてしまう。このため「パターン・プラクティスで生徒も教師もパタン、パタンと倒れ」などと揶揄された。このような流れに対抗し私たちはパターン・プラクティスを言語主体である生徒のものにするために自己表現の実践をしたものである。このパターン・プラクティスはミシガン大学を中心に開発されたのでミシガン・メソッドと呼ばれた。この第2言語習得理論は日本をはじめとする極東におけるアメリカ軍の敵国語短期習得のために開発されたものである。もうこの事実も英語教授法では教えなくなってしまったが、きわめて重要な視点である。

このように、戦後世代の私たちが生きてきた時代の英語や英語教育は戦争と切り離すことができないものである。なお、15-17のうち『新英語大辞典』に収録されている語彙は banzai, hootch, kamikaze, mama-san, pompom である。

## 18. 日本語とアメリカ版英和・和英辞典

kanji など日本語に関する語彙は *OED* などの英語辞書にいくつか収録されている。

- **katakana** 現代日本語において片仮名は西欧の外来語を表記する場合に用いられる。では、他にどんな場面で片仮名は用いられるのであろうか。学生と一緒にこの問題について考えたら、面白いことがわかった。日常生活で片仮名をどんな風に使っているか観察するとよい。「ステルナ」「すぐミギ」「ヤメロ」など掲示板で用いられることが多い。相手の注意を引くために片仮名書きにしているのである。
- **kana-majiri** 仮名と漢字を交ぜて書くことをいう。日本語の文字体系における特徴でなおかつ最大の利点ともいえる。ざっと漢字だけ見れば、だいたいの内容が理解できるのである。私は携帯電話を持たない。持っておれば便利だということはわかっているが持ちたくない。だから、単に想像しているだけなのだが、日本語が仮名交じり文であるために、あの小さな画面の情報量は英語や韓国語に比べ数倍にちがいない。この利点に一番気づいているのは若者かもしれない。
- **hiragana** 平安時代の初めに、漢字の草書体から作られた仮名をさらにくずして作った文字である。「ひらがな」の呼称は後世のものであるが、英語ではケンペル以

降この呼称が用いられている。明治における国語改革案の1つとして、日本文をひらがなのみで表記しようとする考えがあった。私はその考えに反対だ。私の好きな韓国においては、何年も前に漢字を止めてハングル文字だけにした。30年前に韓国を訪れた時には、漢字を読めば新聞記事の内容がつかめたが、家族と訪れた10年前にはもう理解できなかった。漢字文化圏を広げたいものである。

- ・ kanji 「漢字」という日本語が英語文献で用いられたのはつい最近のことである。江戸時代には真名（まな、しんじ）と呼ばれていたが、この日本語は英語文献ではほとんど出てこない。Chinese character などの表現を用いているからであろう。明治時代には漢字は嫌われ者であった。
- ・ Romaji ローマ字は明治になって以降、利用されるようになった文字体系である。明治10年代からローマ字を国字としようとするローマ字会の運動が盛んになった。ヘボン（James Curtis Hepburn 1815-1911）の辞書『和英語林集成』第3版が日本語の綴字法の規範を示した。ただし、この第3版における綴字法は初版と大きく異なる。

一部の学者や好事家が日本語を学んだが、彼らは例外的な存在であった。残念なことに多くのアメリカ人が本気で日本語を学ぼうと考えたのは第2次世界大戦中のことである。軍事上多くの米兵が片言の日本語を短期間に身につけなければならなかった。ミシガン・メソッドが用いられた。また、日本語学習のためには辞書が必要であった。交戦中で日本から辞書が入らなかった。そこで、アメリカ本土においていくつかの日本語関連の辞書が出版された。もちろん海賊版であるが American edition と称した。戦時中アメリカ人が日本語を勉強するのに使った英和、和英辞典を大型辞書から順にここに列挙したい。英語が敵国語であるといわれたところに英語を学んだ日本人には馴染みの辞書ばかりである。以下の表を、英語辞書学を学ぶ者として歴史の証言としたい。なお、下記辞書のなかで編纂者が明記されていないものがある。3の富山房『双解英和辞典』は斎藤静という学者の手になるものである。斎藤は福井大学で英語学を講じた。

- 1) Okakura, Yoshisaburo ed.: *Kenkyusha's New English-Japanese Dictionary on Bilingual Principles*  
1942 Berkely, Ca.: University of California Press.  
1945 Berkely, Ca.: University of California Press.
- 2) Yoshitaro, Takenobu ed.: *Kenkyusha's New Japanese-English Dictionary, American edition*  
1942 Cambridge, Mass.: Harvard University Press.  
1942 London.: Lund, Humphries.

- 3) *Fuzambo's Comprehensive English Japanese Dictionary*  
1942 Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- 4) Satow, E. and I. Masakata ed. Revised by E. M. Habart-Hampden and H. G. Parlett: *English-Japanese Dictionary of the Spoken Language*  
1942 South Pasadena, California: P. D. and Ione Perkins.  
1943 South Pasadena, California: P. D. and Ione Perkins.
- 5) *Sanseido's New Concise English-Japanese Dictionary*  
1944 Minneapolis: Harrison & Smith Co.
- 6) *Ozaki's English-Japanese Dictionary of Sea Terms*  
1942 Ann Arbor, Michigan: Edwards Brothers.  
1942 Ann Arbor, Michigan: George Wahr, Publisher.  
1943 Ann Arbor, Michigan: Edwards Brothers.
- 7) *Ozaki's Japanese-English Dictionary of Sea Terms*  
1942 Berkeley, Ca.: University of California Press.  
1943 Berkeley, Ca.: University of California Press.  
1944 Berkeley, Ca.: University of California Press.  
1945 Berkeley, Ca.: University of California Press.
- 8) Cresswell, H. T., J. Hiraoka and R. Namba ed.: *A Dictionary of Military Terms: English-Japanese, Japanese-English*  
1942 Chicago: University Chicago Press.  
1942 A. M. F. Melbourne (Australian edition)  
1942 Chicago: University Chicago Press; London: Kegan Paul, Trench, Trubner.  
1943 Chicago: University Chicago Press.  
1945 Chicago: University Chicago Press.
- 9) Fujita, Nintaro ed.: *Kenkyusha's New English-Japanese Dictionary, Commercial and Technical Terms*  
1944 South Pasadena, California: P. D. and Ione Perkins.

この一覧からも明らかなように、一般的な辞書だけでなく軍事関連の辞書も翻刻された。また、これらの辞書の出版は1942年から45年に集中している。この時期は、ルース・ベネディクトが日本研究の仕事を1944年6月に委嘱され『菊と刀』を1946年に出版した時期とちょうど一致する。これは決して偶然の一致ではない。むしろ、このことは『菊と刀』の性格を如実に物語っている。

### 参考文献

- 荒川惣兵衛 (1967) 『角川外来語辞典』 角川書店  
Barnhart, C. L., Sol Steinmetz and R. K. Barnhart (1973) *A Dictionary of New English 1963-1972*. London: Longman.  
ベネディクト, ルース (1948) 『菊と刀 日本文化の型』 長谷川松治訳, 社会思想研究会出版部  
チェンバレン (1969) 『日本事物誌』 1と2, 高梨健吉訳, 東洋文庫, 平凡社

- 早川 勇 (2003a) 「英語に入った日本語語彙の初出年調査」『日本語科学』13号, pp. 79–108.
- 早川 勇 (2003b) 『英語のなかの日本語語彙—英語と日本文化との出会い—』辞游社
- ラミス, C・ダグラス (1981) 『内なる外国—『菊と刀』再考』加地永都子訳, 時事通信社
- 松村 明編 (1995) 『大辞林』第2版, 三省堂
- Mish, Frederick C. ed. (2003) *Merriam-Webster's Collegiate Dictionary*. Eleventh edition. Springfield, Mass.: Merriam-Webster. [ウェブスター大学版]
- 三井秀樹 (1994) 『美のジャポニズム』文藝春秋
- Onions, C. T. ed. (1973) *The Shorter Oxford English Dictionary on Historical Principles*. The third edition. Oxford: Oxford University Press.
- Partridge, E. (1948) *A Dictionary of Forces' Slang 1939–1945*. London: Secker & Warburg. [ノートルウッド軍俗語辞典]
- 新村 出編 (1998) 『広辞苑』第5版, 岩波書店
- Simpson, J. A. and E. S. C. Weiner ed. (1989) *The Oxford English Dictionary on Historical Principles*. The second edition. Oxford: Oxford University Press.
- Stein, J. ed. (1966) *The Random House Dictionary of the English Language*. New York: Random House. [ランダムハウス大辞典]
- 竹林滋編集主幹 (2002) 『新英和大辞典』第6版, 研究社